

松永澄夫著「哲学への誘(いざな)い、新しい形を求めて、哲学の立ち位置、総序」

東信堂、2010年10月10日刊を読む

哲学の誘(いざな)い、新しい形を求めて、哲学の立ち位置

1. さて、私は、「哲学は言葉の織物としてしか形をなさない」と言った。だが、小説などとは違う。人は個々の小説を楽しんだり、つまらないと思ったりするが、そういう対象のごとく、哲学というものがあるのではない。人が哲学に心惹かれるとき、哲学の営みとはどのようなものだろうか、そこに興味がいつているのだろうか、と私は思う。いわば「小説を書く」とはどういうことだろうか、ということの方に、そして、書くことで何が得られるか、ということに関心が向く、こちらに相当する気の惹かれがあるのではないだろうか。実際、「哲学は言葉の織物としてしか形をなさない」ということの内実は、「哲学は言葉を武器にしてしか、言葉に頼り言葉を紡ぐことでしか、営めない」ということであって、「哲学は言葉を素材にした作品である」というのではない。
2. そこで、本叢書は、その哲学の営みに読者を誘うことを意図している。哲学の営みがどういうものか、それ自身を描くことと、営みの重要な実例を示すことで、狙いが実現できるのではないかと考えている。(興味深いことに、哲学の営みがどういうものかを描くことが哲学の営みの部分をなす、という構造が哲学にはあるが、そのことも読者は発見するに違いない。)
3. 哲学への誘(いざな)いとは、差し当たりは「哲学」という言葉に惹かれて哲学を訪ねようとする人たちに(また願わくば哲学を敬遠する人にも)、自分でも哲学を試みるべく招くことである。それは多くの料理の本が、手に取る人に、ほら、こんな料理をつくってみませんか、と誘い、そして、それよりは一層、「同じようにつくって」と指示するのを超えて、「参考にしてください」と願う、その姿勢に似ている。もちろん、料理書にこのような読者への呼びかけが可能であるのは、料理書が或る料理の記録としての価値をももつからである。同様に、本叢書に見ることのできる論稿も執筆者たちの哲学の営みの或る部分の記録であり、その上で、誘いという働きもなし得る。しかも、哲学の本には料理書より有利なことがある。料理書の場合、記録は料理することそのことではないし、できあがって食べるばかりになった料理でもない。ところが、哲学の記録を辿(たど)ることは、そこで用いられている言葉を駆使してなされた哲学の営みを追体験する試みとなる。哲学は元々が言葉によって可能となっているのだから。そして記録の全体は、小説のように対象の位置に立つ作品(自足する作品)ではないが、そのまま、執筆者が言葉を通して見ること、理解することができた事柄を留(とど)めているのである。
4. なお、良い料理書の条件は、読者の手近にある材料でつくれる料理をつくろうと呼びかけることである。いわば単なる鑑賞用の料理、人がそのような料理もあるのかと思っても、自分で手に

入れることが決してない材料を必要とし、口にすることもないであろう料理を紹介する本もあってよいが、それは別種の性格のものである。本叢書で執筆者たちは、読者の世界とは無縁の別の世界のものと思われるような言葉を使わなければ実現しないような哲学を示そうとは思っていない。

5. 「哲学」という言葉に惹かれる人に、何か知識を提供する仕方ではなく、哲学の営みに誘う仕方、「哲学」という言葉に内容を与えて返すこと、それを本叢書は意図している。

総序 ~

[コメント]

日本哲学会のリーダーである松本澄夫先生が渾身(こんしん)の力を振り絞ってまとめ上げた「哲学への誘い、新しい形を求めて」5巻の「総序」からの引用。混迷する現代、哲学を渴望(かつぼう)する人々への誘いの道を示して下さったこの試みの意義は大きい。1週間に1章ずつでも、ゆっくりじっくり、何回も、深く深く本シリーズを読み込み、哲学的思索の一端に触れたい。

- 2010年11月16日 林 明夫記 -